

「あかし保育絵本土」養成の試み ～どう教えどう学んだか（1）（2）～

保育者が最も望んだことから教えられたこと

佐々木宏子（鳴門教育大学名誉教授）

1 保育者は、子ども－絵本－保育（者）の関わりの中でどのようなことを知りたいと望んでいるのか

「あかし保育絵本土」の講座に応募してきた保育者に、まず、「なぜこの講座を受けたいのか」の「動機」を尋ねたところ、大きく三つの傾向が見られた。

（応募期間：2018年5月31日～7月10日）

（1）「選書と読み方」が主たる動機／7名。具体例の一部

（文章は要約せずそのまま。以下同）

- ①絵本を読むのが好きで、子どもたちにも読む機会を多く持つようにしている中で、改めてどんな絵本を選べばいいのか知りたい。又、ただ読んで終わりにしてしまわないためにはどうしたらいいか学びたいと応募しました。
- ②子ども達が喜んだり、遊びの中で広がりを見せたりするような選書の仕方や絵本の読み方等を学びたい。
- ③保育者としてどのような絵本を選んだらよいか、どのような読み方をすると子供たちの共感を得られるか学びたい。

（2）ごくシンプルで一般的な動機／7名。具体例の一部

- ①絵本のことをもっと知りたかったので、日々の保育に役立てたいので。
- ②以前から絵本は好きで、もう少し深い部分を学びたかった。
- ③絵本の必要性や、子どもの何に影響を与えているのかを学びたいです。

（3）独自の動機／11名。具体例の一部

- ①絵本から感じ取る思いは子どもそれぞれで、正解も不正解もない。自由な思いを絵本から感じて欲しいと思い、日々、絵本の時間を大切に思って保育をしている。明石市でこのような取組があることをうれしく思います。ぜひ参加したいです。
- ②子どもと関わる中で、絵本の読み聞かせがみんな大好きであったこともあり、朝の会では、毎日2冊を必ず読み聞かせをしています。人の声で読み、子どもたちの感情や反応が伝わり、コミュニケーションの一つとしても大切な「絵本」。保育の中で言葉や感情、想像力など大きな繋がりとなっていくと思うので、この機会に学び、保育の中に取り入れていきたいと思い志望しました。
- ③現在、6歳、4歳、2歳の子どもを育児中です。絵本の持つ力、楽しい触れ合いの時間を作ってくれる素晴らしさにいつも助けられてきました。特に3歳以下の子どもにとっては、現実とファンタジーの境界線があいまいな分、良い絵本は子どもの世界を

広げ深めてくれるものだと感じています。そんな心に残る絵本を集団保育の場所でも実践できる保育士になりたいと考え応募しました。

- ④絵本の選択の難しさを感じたり、子どもたちの言葉の不足、物語・昔話の認知の低さ等を年々感じています。対象年齢についても疑問に思う部分がある為、そのあたりも含め、学ぶことが出来たらと思いました。

2 「動機」とその後のエピソード記録事例との関わり

本講座では、講義（ワークショップを含む）の3本柱を

- ①絵本を選ぶ力 —絵本の環境を整える—
 - ②絵本を乳幼児に読む力・読みあう力—乳幼児の内面的な豊かさを感じ取る—
 - ③絵本の読みあいの様子を分析・省察し、記録する力—絵本を通した保育のまなざし—
- というように定めている。

単に保育者と子ども達が絵本を読み合う時間を持つというだけではなく、最終的には絵本を読み合い、絵本の世界を通して感じたことを表現し合うことで、お互いの個性の発見や尊重に繋がることを期待するからである。やがて、自由で個別性を尊重する姿勢が保育そのものの有り様や環境と子ども、保育者と子どもの関係性の原理として機能することを、切に望むものである。

本研究では、保育者それぞれの「動機」の違いと、保育者が子どもと絵本の読み合うプロセスを「分析・省察し記録する力」との間には何らかの関連があるのかに注目してみたい。受講生の記録データは、全7回の講義のうち第6回目の講義課題（2019年1月／エピソードの収集・記録）への回答として提出されたものを採用した。

(1) 「独自の動機」をもつ受講生のエピソード記録事例からいくつかをあげてみる。

(文章は要約せずそのまま。以下同)

- ①A保育者（3-①）の記録：『けんかのきもち』（柴田愛子文／伊藤秀男絵／ポプラ社）
（対象は4歳児／19人／保育所／記録2018年6月）保育歴23年。記録のきっかけ：玩具の取り合いでけんかになったとき、怒りがおさまらないのに「ごめんね」「いいよ」のやりとりをしていて

「けんかのきもち」の絵本を読んだ数日後、男児2名が玩具の取り合いのけんかにより、取ろうとした男児が納得していないのに「ごめんね」と怒りながら言い、取られた男児も許していない表情をしているのに、怒りながら「いいよ」と言った。

その様子を側で見ていた女兒が『けんかもきもち』やん。けんかのきもちは終わらないやったら『ごめんね』を言わずに気持ちを言ったらいいやん」と言った。日常から、自分の気持ちを伝えるよう話していたこと、絵本の内容が女兒には結びついた様子だった。

言い合いをした男児（B）は、「先にボク使っていたのにA君が取ったから返して欲しかった」。A児は「だってB君が使っていなかったから」と話し始め、B児が遊んでいたのをA児が遊びたくて、手を離れたすきをねらって取ろうとしたことが分かった。

自分の気持ちを話すことで、本当の気持ちも分かり、お互いが納得でき、B児が遊び終

わるとA児に貸していた。保育者が仲介することなく、子ども同士で解決できたことが、私の心の成長になった出来事でした。

②B保育者（3-②）の記録：『もこ もこもこ』（たにかわしゅんたろう／もとながさだまさ／文研出版）（対象は1歳児／10人／保育所／記録2019年1月）保育歴5年。
記録のきっかけ：読み聞かせをしているとき（何回も読んでいる）

月齢差があるクラスの中で、2～3語文、自分の思いをしっかりと伝えることができる子、言葉が出始めた子など様々な子どもたちがいる中で、みんな大好きなお気に入りの1冊であった『もこ もこもこ』。最初のページを開いた瞬間から子どもたちは、自然に口に指をあてて「し～ん」と静かに発語し、今から始まる絵本の世界に目をキラキラと輝かせて待つ姿が印象的です。

「もこ」の様々な表現を言葉と一緒に伝える子。両手を合わせて「もこ」と突き出したり、その場で立ち上がり「もこ」と表現する子など、子どもたち一人ひとりがいろいろな表現をみせてくれるのです。「パク」「もぐもぐ」のところになると、子どもたちは大興奮です。

手を叩いたり、飛び上がったり、はずかしい子も大きな表現はしませんが目をパチパチとまばたきし、口を大きくあけて驚く表情を見せてくれました。この絵本はセリフも物語もありますが、言葉のリズム、絵本描写にのせて、言葉が少ない子どもにかぎらず、みんなが、それぞれ自分なりの表現や思いを自然と身体や言葉で表し、子どもたちの表情も豊かになる絵本であり、子どもたちの個々の思いが伝わる場面でもありました。

③C保育者（3-③）の記録：『かんかんかん』（こどものとも0.1.2のむらさやか文／川本幸制作／塩田正幸写真／福音館書店）（対象は0.1.2歳児／5人／保育園／記録2018年12月）保育歴14年。記録のきっかけ：夕方、多くの園児が降園し（17：30頃）0.1.2歳児が合同保育で自由遊びをしていた時、この絵本を読んだ後、2歳男児が「かんかんかん」と腕で踏切を作って見せたこと

多くの園児が降園し、0歳児の部屋で0.1.2歳児5人が合同保育となっていたとき、絵本が大好きな1歳Yちゃんが本棚から「かんかんかん」を選んで、読んでと保育者に持ってきた。1回目は2～3人が聞いていたが、2回目（リクエストがあったため）になると、それまで自由に遊んでいた5人全員がくいいるように絵本を見つめていた。

この絵本は絵ではなく写真で表現されているため、これは何の動物だろうかと自由に意見を述べ合った。2歳児のT君が「かんかんかん～」と腕を踏み切りにして表現したところから、この絵本をテーマにした遊びが始まりました。

子ども：「かんかんかん～」（踏切音をつぶやきながらも、自分は電車になっている）、保育士：「〇〇くん電車がとおります。子ども：ハイハイをして四足歩行で猫になり、子どもと保育士：「かんかんかん～」、子どもと保育士：「ニャアニャア列車が通ります」。さらに盛り上がり、しっかり歩ける1.2歳児3人がつながって、子ども：「かんかんかん～」、保育士：「みんな列車が通ります」。

普段は個人個人での遊びが中心となる夕方の自由遊びですが、この日は1冊の絵本をきっかけに、5人全員で世界を共有しあいながら「お母さん列車がやってくる」お迎えを待つことができました。

さて、以下の1ケースは、第6回目ではなく第3回目の課題（つぶやきの収集）において提出されたレポートであるが、興味深いので特別に掲載する。

④D保育者（3-④）の記録：『宝島』（原作・スティーブソン／文・山本護久／絵・池田龍雄／世界文化社）（対象は5歳児／8～15人／保育園／記録2012年10月）保育歴16年。記録のきっかけ：園庭での外遊びの時間に、剪定したあとの葉や小枝、枝葉があったとき

- ・砂場で大山を作っていると海が出来た。A：「俺、海賊やる」。
- ・海賊仲間が増えて、基地をつくる事になる。
剪定した枝葉や、ツルを使っても良いと保育者から言われる。タイヤを積み、入ることができる家を作り始める。枝・ツルで屋根の梁を組みたて、葉も乗せる。B：「敵が来ても見つからんようにしろ！」。C：「俺たちの宝物を、どこに隠すんだ?!」。D：「船から鍋を取って来たぞ！」（砂場の玩具）。E：「お前達！ メシを作れ！」（女の子に命令）。
- ・火がないと料理ができないと言われ、キャンプ経験や絵本から、たき火のような物を準備する（小さいタイヤの穴に小枝や葉を沢山集める）。
- ・乱暴者の海賊には「お酒もいるんちゃう？」と、雑草から色水を作ってお酒にしようとする。
- ・ポケットに入れたハンカチ（しわくちゃ）を出して「宝の地図を見つけた！」と見せる。いつの間にか加わった友だちと「宝を探しに行くぞ！」と園庭中を探検していた。
(下線は佐々木)

(2)「選書と読み方」が主たる動機である受講生の中からいくつかの事例をあげてみる。

①E保育者（1-①）の記録：『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック さく／じんぐうてるお・やく／富山房）（対象は3歳児／20人／こども園／記録2019年1月）保育歴10年。記録のきっかけ：好きな遊びの時間に

クラスで「かいじゅうたちのいるところ」を読み、かいじゅうごっこを楽しんだ後、好きな遊びの時間に、数人（4.5人の子ども達）が「かいじゅうたちのいるところ」の絵本を囲んで話をしていました。Aちゃんが先生のような口調で「かいじゅうがいました」「かいじゅうはほえました」等、ページをめくりながら話をしていると、文字のないページのところで「楽しそうに笑ってる」「何してんやろな」「かいじゅうおどりやん」という声が次々に飛びだし、絵の動きを真似してダンスのようなそぶり（仕草）を皆で笑い合っている姿が見られました。

②F保育者（1-②）の記録：『トントンとめてくださいな』（こいでたん・ぶん／こいでやすこ・え／福音館書店）（対象は2歳児／23人／保育園）／記録：2019年1月）保育歴14年。記録のきっかけ：クラス全員（10：30頃）で絵本を読んでいるとままごとコーナーにドアを作ると、「トントンとめてくださいな」「どうぞどうぞ」と絵本のフレーズを真似て楽しむ子、ドアが気に入って遊んでいる子、中に入って世話遊びをする子など、それぞれで遊んでいる。ストーリーは、保育士に読んでもらい分かっている子もいるが、まだまだ分からない状態である。

外遊びからの帰り、お茶を飲んだ後、全員で本を読むと熊が出てくる場面で、他の動物が「ぶるぶるふるえました」「ほかのみんなもふるえました」と読むとふるえ出し、それを見て他の子も真似をし出しました。「だれかがしくしくなきました」「ほかのみんなもなきました」で「エ〜ン」と皆で泣いたりとその場面を皆で楽しみ、次のページの絵を見て仕草を真似たりと、その場面がどの子も好きになっていました。その後、布団をかぶって遊びました。

③G保育者（1-③）の記録：『バスがきました』（三浦太郎／童心社）（対象は0歳児／6人／保育園／記録：2019年1月）保育歴3年。記録のきっかけ：おやつの前に

おやつの前にイスに座り絵本を読んでいる時、この絵本はみんな大好きで見たいと言って子供がもってきます。バス停でねずみ、うさぎ、ライオンが次々にバスを待っているのですが動物が出てくるたびに、耳に手をあててウサギの間根っこをしたり、花に手をあててゾウになったりしながら楽しそうに見てくれます。

最後、みんながバスに乗って出発する時は、保育者が「出発進行！」と手をあげるとみんなも手をあげ、そこからバスごっこがはじまりました。

(3)「ごくシンプルで一般的な動機」をもつ受講生の中からいくつかの事例をあげてみる。

①H保育者（2-①）の記録：『11ぴきのねこふくろのなか』（馬場のぼるぶん・え／こぐま社）（対象は4歳児／14人／保育所／記録：2018年12月）保育歴16年。記録のきっかけ：絵本を何度か読んだ後の遊びの中で

11ぴきのねこシリーズの絵本が好きなクラスでした。生活発表会で取り組もうと思いい、何度かシリーズの本を読んできました。戸外で助け鬼ごっこをしている時「ねことウヒアハになってしよう」という子に「さんせーい」他の子が答える姿がありました。逃げる時に「ニャゴニャゴ」と言ったり、鬼は「ウヒヒ、アハハ」と追いかけてたりして遊んでいました。

その後も、助け鬼ごっこをする時は、ねことウヒアハになって遊んでいました。保育士がひょうたん鬼ごっこの遊びを始める時も「ウヒアハとねこになって遊ぶ？」と聞いてみると「さんせ〜い」と言い、役になりきって遊んでいました。生活の場面でも廊下を走っている子に「しょくん、ろうかを走ってはいけない」と注意をしたり、「おしゃべりしてはいけない」など、どらねこたいしょうの口調を真似たりして話す姿が多く見られました。日々、遊びが広がっていています。

② I 保育者（2-②）の記録：『のせてのせて』（松谷みよ子ぶん／東光寺啓・え／童心社）（対象は0歳児／9人／保育所／記録：2019年1月）保育歴15年。記録のきっかけ：クラスで絵本読みの時

生活発表会でしょうと思い、いつもなら座れてお話を聞いているのだが、この日は立っての動きも入れてみようと思い立って「まこちゃんの～」を歌いながら始めた。車を運転している様に動いていて「びゅ～ん」というところで子ども達何人かがくるくと回転した。

以前良くしていた遊びの中で「とつとことつとこ　さんぽさんぽに行こう　山にいたら、風が吹いてきたひゅーん」の動きを思いついたみたいで同じ風の動きだと思って驚いた。（保育士がする前に子どもたちが動いた事に）。

③ J 保育者（2-③）の記録：『くっついた』（三浦太郎／こぐま社）（対象は1歳児／1人／保育園／記録：2018年9月）保育歴4か月。記録のきっかけ：おむつ替えをしている最中で、個人の名前とそれぞれマークの貼ってあるタオルかけがそばにあったこと

1歳男児のマークが象であった。タオル掛け以外の個人のカゴなどもマークを貼っていて、元々自分のマークに興味を持ち認識できている段階であった。

おむつ替えの際、すぐ近くにあったタオル掛けに近づき、自分のマークの象を指さしたため「ぞうさん」「〇〇くんのぞうさんだね」というと、自分の手をほっぺにくっつける姿が見られた。

3 「動機」とその後のエピソード記録との関連から考察したこと

先ず、一般的ではあるが「動機」の内容が保育者自身の独自の視点に基づいている場合は、結果としてエピソード記録にも、子どもたちの姿が第三者にも生き生きと伝わってくる場合が多い。「絵本から感じ取る思いは子どもそれぞれで、正解も不正解もない」（A保育者／3-①）とあるように、最初から絵本を使って子どもに何かを教え込もうとする姿勢はない。「人の声で読み、子どもたちの感情や反応が伝わり、コミュニケーションの一つとしても大切な「絵本」。保育の中で言葉や感情、想像力など大きな繋がりとなっていくと思う」（保育者B／3-②）、「現実とファンタジーの境界線があいまいな分、良い絵本は子どもの世界を広げ深めてくれるもの」（C保育者／3-③）というように、絵本と子どもの関係性については、かなり深い認識水準を示している。

その結果、描かれているエピソードも子どもたちの主体的な発想や遊びに基づき展開されていて、保育者の姿は前面に出てはいない。これらエピソード内容から伝わることは、ニュートラルな色彩を持つ「絵本の読み聞かせ」論、あるいは「良書絵本のリスト」という範疇を超えて、明らかに背後に保育者自身の明確な保育哲学（思索のあと）の存在が見える。

私は、保育者から「〇〇歳の子どもにふさわしい絵本リスト」を教えて欲しいという質問を受けると、いつも困惑する。その問いには、絵本が子どもとの関係性において把握で

きていない平板な絵本観が見えてくるからである。そこには、子どもと保育者との関係が抜け落ちていて、どこかにモデルとなる読み方やモデルとなる選書一般があると信じている姿が見える。勿論、大きな意味ではそのような良書のリストや読み方はあるだろう。しかし、絵本が保育の中で実際の力を発揮するには、保育者と子どもの絵本歴、子どもたちの育ちや環境、その家族が住む地域の文化や自然のありかた等など、生きて動いている子どもたちの現在に深く関わり、根ざしたところから「選書と読み方」は生み出されなくてはならないと思うからである。

「独自の動機」を持っている保育者には、その中に絵本と子どもをめぐる深い思索のあとが見える。ちなみに保育者Aは、ある課題に対するレポートで「保育って、全く同じ状況、予想される行動などが違うので、その時々で子どもの様子を見ながら対応するので、“どのように”と聞かれても回答は難しいです。そのときの子どもの気持ちや状況に応じて子どもが納得の行く対応にしたいと思っています」と述べている。

そこには、経験上から予測される詳細で明確なある種の「回答」は存在しても、最後は「難しい」という究極の回答が存在することが示されている。ブックスタートを発案したウェンディ・クーリング氏が言う「子どもが楽しんでいて、反応しているものであれば、それがその子にとっての良い絵本なのです」という答えに繋がるものであろう。「良い絵本」とは、一人ひとりの子どもの「納得できる」ものでなければ始まらないことを両者は示唆している。

研究者である私が学んだことは、目前に存在する受講生の背景が多様で複雑であり、どの声も切実な「いま・ここ」を示している。ともすれば、研究者は自分自身の興味やテーマの新規性に惹かれて進もうとするが、それは現実の実践の場では、あまり力を持たないことになる。

文献：NPOブックスタート編（2019）『すべての赤ちゃんに絵本を』NPOブックスタート（ブックスタート発案者：ウェンディ・クーリング×佐々木宏子の対談を含む）

付記

保育実践の解釈を考える時、理論的な問いかけに対して、経験から予想される回答はいくつかあり得るでしょう。が、「難しい」としか言えないとは、やはり子ども×保育者×環境という「その場固有の問題」が分析できなければ最適解は導き出せないという意味です。「難しい」には二通りあるのです。単純に「難しい」と、具体が分からなければ「難しい」の究極の二通りです。

発表後記

発表後、当日会場に来られなかった方々の中で、様々なルートで資料を読まれた後、いくつかの興味深いご指摘を受けたので記載してみます。

- ・研究者が、参加者のエピソード記録事例を丁寧にとり、それを受講者が読みあうことで、こんな風にお互いを発見していくのかと、感激しました。
- ・絵本に限らず、時間に迫られる現場では、保育を「語り合う」ことのほうが、新人保育者たちには自分の気持ちを表現することや先輩保育者の価値観を知る場としては、良いのではないかと
- ・10月の幼児教育無償化の後は保育の質についての議論や実践的取り組みが課題になると考えられます。明石は先んじてこの課題に取り組んでいることがよくわかります。